

福沢諭吉著「新訂福翁自伝」<sup>ふくおうじてん</sup> 岩波文庫、岩波書店、1978年10月16日刊を読む

## 王政維新

### 1. 上野の戦争

- (1) 新銭座の塾は幸いに兵火のために焼けもせず、教場もどうやらこうやら整理したが、世間はなかなか<sup>やかま</sup>喧しい。
- (2) 明治元年の五月、上野に大戦争が始まって、その前後は江戸市中の芝居も<sup>よせ</sup>寄席も見世物も料理茶屋も皆休んでしまって、八百八町は真の闇、何が何やらわからないほどの混乱なれども、私はその戦争の日も塾の課業を罷めない。
- (3) 上野ではどんどん鉄砲を打っている、けれども上野と新銭座とは二里も離れていて、鉄砲玉の飛んで来る<sup>きづかい</sup>気遣はないというので、丁度あるとき私は英書で<sup>エコノミー</sup>経済の講釈をしていました。
- (4) 大分騒々しい様子だが煙でも見えるかというので、生徒らは面白がって<sup>はしご</sup>梯子に登って屋根の上から見物する。
- (5) 何でも昼間から暮過ぎまでの戦争でしたが、<sup>こちら</sup>此方に関係がなければ怖いこともない。

### 2. 日本国中ただ慶応義塾のみ

- (1) <sup>こっち</sup>此方がこの通りに落ち着き払っていれば、世の中は広いものでまた妙なもので、兵馬騒乱の中にも西洋の事を知りたいという気風はどこかに流行して、上野の騒動が済むと奥州の戦争となり、その最<sup>さいちゅう</sup>中にも生徒は続々入学して来て、塾はますます盛んになりました。
- (2) 顧みて世間を見れば、徳川の学校は勿論つぶれてしまい、その教師さえも<sup>ゆくえ</sup>行衛がわからぬくらい、まして維新政府は学校どころの場合でない、日本国中いやくも書を世読んでいるところはただ慶応義塾ばかりという有様で、その時に私が塾の者に語ったことがある。
- (3) 「むかしむかしナポレオンの乱にオランダ国の運命は断絶して、本国は申すに及ばずインド地方までことごとく取られてしまって、国旗を上げる場所がなくなったところが、世界中<sup>のこ</sup>纔に一箇所を遺した。
- (4) ソレは即ち日本長崎の出島である。
- (5) 出島は年来オランダ人の居留地で、歐洲兵乱の影響も日本には及ばずして、出島の国旗は常に百尺竿頭に翻々してオランダ王国は<sup>かつ</sup>曾て滅亡したることなしと、今でもオランダ人が誇っている。
- (6) シテみるとこの慶応義塾は日本の洋学のためにはオランダの出島と同様、世の中に如何なる騒動があっても変乱があっても未だ<sup>かつ</sup>曾て洋学の命脈を<sup>た</sup>断やしたことはないぞよ、慶応義塾は一日も休業したことはない、この塾のあらん限り大日本は世界の文明国である、世間に頓着するな」
- (7) と申して、大勢の少年を励ましたことがあります。

### 3. 塾の始末に困る、楽書無用

- (1) ソレはソレとしてまた一方から見れば、塾生の始末には誠に骨が折れました。
- (2) 戦争後意外に人の数は増したが、その人はどんな種類の者かというに、去年から出陣してさん

ざん奥州地方で戦って漸く除隊になって、国には帰らずに鉄砲を捨ててそのまま塾に来たという  
ような少年生がなかなか多い。

(3) 中にも土佐の若武者などは長い朱鞘しゆざやの大小さを挾さして、鉄砲こそ持たないが今にも斬きって掛ろう  
というような恐ろしい顔がんにしよく色いろをしている。

(4) そうかと思うと、その若武者が赤い女の着物を着ている。

(5) これはドウしたのかと言うと、会津ふんどで分捕りした着物だと言って威張いっている。

(6) 実に血ちなまぐさ 腥しんい怖い人物で、一見まず手の着けようがない。

(7) ソコで私は、前申ぜんす通り新銭座の塾を立てると同時にきわめて簡単な塾則をこしらえて、塾中  
金かねの貸借かしかりりは一切相成らぬ、寝るときには寝て、起きるときには起き、食うときには定めの時  
間に食堂に出る、それから楽書らくがき一切相成らぬ、壁や障子に楽書を禁ずるは勿論、自分所有あんどんの行灯  
にも机にも一切の品物に楽書は相成らぬというくらいの箇条で、既に規則を決めた以上はソレを  
実行しなくてはならぬ。

(8) ソコで、障子に楽書してあれば私は小刀をもってそこだけ切り破やぶって、この部屋に居る者が元  
の通りに張れと申し付ける。

(9) それから行灯に書いてあれば、誰の行灯でも構かわぬ、その持ち主とがを咎とがめると、時としてはその  
者が「これは自分でない、人の書いたのです」と言っても私は許さぬ。

(10) 「人が書いたと言うのは言い訳けにならぬ、自分の行灯に楽書されてソレを見ているという  
のは馬鹿だ、馬鹿の罰に早々張り替えるが宜よろしい、楽書した行灯は塾に置かぬ、破るからアトを  
張はって置きなさい」というようにして、寸毫すんごうも仮かさない。如何いかに血ちなまぐさ 腥しんい若武者が何と言おうと  
も、そんなことを恐れていられない。

(11) ミシミシやっ付けてやる。名は忘れたが、不図ふと見たところが桐の枕いかがに如何な楽書がしてある。

(12) 「コリヤ何だ。銘々の私有品でも楽書は一切相成らぬと言ったではないか、ドウいう訳けだ、  
一句の返答も出来なからう。

(13) この枕は私は削りたいけれども削ることが出来ない、打毀ぶちこわすから代りを取って来なさい」

(14) と言って、その枕を取り上げて足で踏み潰つぶして、サアどうでもしろ、攫つかみ掛けて来るなら相  
手になろうと言わぬばかりの思惑を示したところで、決して掛らぬ。

(15) 全体私は骨格は少し大きい、本当は柔術も何も知らない、生まれてから人を打ったことも  
ない男だけれども、その剣幕はドウも撃うちそうつかな攫つかみ掛りけしきそうな気色で、口の法螺ほらでなくして  
身体からだの法螺で吹き倒した。

(16) ところがみな小さくなって言うことを聞くようになって来て、ソレでマア戦争帰りの血ちなまぐさ 腥しんい  
奴もおのずから静かになって塾の治まりが付き、その中には真成うちな大人ホントウしい学者風の少年も多く、  
至極勉強してますます塾風を高おとな尚にして、明治四年まで新銭座に居ました。

P.202 ~ 205

## [コメント]

慶應義塾の創業者で塾長の福沢諭吉先生の自叙伝「福翁自伝」。上野で官軍と旧幕軍がドンパチや  
っている中、8 km位はなれた慶應義塾では福沢先生が経済学の講義をしていたという有名な場面。「文  
明論の概略」と併せ読むと、面白いこと限りがない。福沢先生の教えの「独立自尊」とは何か、少し  
ずつ実感できる。